

## マーロウの *Doctor Faustus* と *The English Faust Book*

坂 本 つや子

**要旨：**クリストファー・マーロウの戯曲、*Doctor Faustus* の主人公フォースタスについて、マーロウが資料として用いた *The English Faust Book* をもとに検討する。順序は次のとおりである：1 ヴィッテンベルクで学位を取得したフォースタスが悪魔と契約を結ぶ経緯、2 数回の大旅行（地獄と天界の旅、ローマ訪問、世界旅行の途上樂園を遠望する）について、3 カロルス5世の宮廷訪問、4 アンホルト公爵夫妻訪問、5 トロイのヘレンについてのエピソード、6 ワグナーを相続人に指名する、学者たちとの別れ、手記の発見。

*The English Faust Book* では、フォースタスはルネサンス人として異教の文化を学び、神の領域に属する知識を手に入れるため、冒険的探求の旅に出る。彼は手記を残し、死後出版されるよう心を配る。*Doctor Faustus* では、フォースタスは悪魔に魂を売ることによって人間に隠されている知識を獲得するが、その知識は彼を解放せず、むしろ神が支配する世界の枠組みの堅牢さを認識させる結果となる。しかし彼が高く評価するギリシア、ラテン世界の思潮は、中世的世界の枠組みを壊す力を秘めている。

### はじめに

クリストファー・マーロウの *Doctor Faustus* は、*The English Faust Book* を資料にして書かれた作品である。*The English Faust Book*（以降 EFB と略す）は、1587年に匿名作者の作品としてドイツで出版された *The German Faust Book*（以降 GFB と略す）—実在の George (Jorg) Faustus (died c. 1539) をモデルにして書かれ、ドイツ国内において当時のベストセラーとなった。その後ヨーロッパ各国で相次いで翻訳、出版された—の人気を受けて、英国においても P. F. Gent（イタリック表記された‘Gent’については姓でなく「紳士」の意の可能性が高い）なる匿名の人物による翻訳版が出版されたものである。

EFB の出版年について述べると、現存する一番古い版は 1592 年出版のものが Shrewsbury School Library に 1 冊保管されており、他に出版年不明の断片があるのみである。しかし EFB の critical edition の編者である John Henry Jones は、EFB が最初に出版されたのは 1588 年であると推定している<sup>(1)</sup>。また William Empson は、GFB の翻訳者である P. F. Gent が、マーロウもその一員である、第 9 代ノーサンバーランド伯爵ヘンリー・パーシーの周辺に集まっていた学者や芸術家たちの一人であった可能性を指摘している。この仮定に基づいて Empson は、マーロウが草稿の段階で EFB を読んで *Doctor Faustus* を構想し、また演劇界、出版業界では戯曲と EFB とをタイアップさせて商業的成果を上げようとしたのではないかと示唆している<sup>(2)</sup>。本論では *Doctor Faustus*, A-text と EFB を参照しつつ比較検討を行う。

## 1 ヴィッテンベルクで学位を取得したフォースタスが悪魔と契約を結ぶ経緯<sup>(3)</sup>

マーロウは *Doctor Faustus* において、主人公ジョン・フォースタスの生い立ち、ヴィッテンベルクにおける学究としての生活、および魔術研究から悪魔との契約に至る過程について、大枠では EFB に従っている。最初に EFB を概観してみよう。

ドイツのワイマールにあるローデの町に、貧しい農夫の息子として生まれたフォースタスは、ヴィッテンベルクに住むおじの後継ぎになる。当地の大学で神学を学ぶ傍ら、密かに降霊術や魔術を極めようとして、おじを心配させる。卓抜した学識を認められて神学博士の学位を授与されるが、数学にも造詣が深かった。また世俗的な野心も持ち合わせていた彼は、占星学や医学においても優れた技量を見せたが、これらはかなりの収入を得ることが期待できる学問であった。

フォースタスは魔術研究に没頭するうちに、驚の翼を得て全世界を飛翔し、天と地の秘密を探りたいとの望みを抱くようになる。そこで日暮れ時にヴィッテンベルク近郊の Spisser Waldt という森の中の十字路に行き、魔法使いの杖で地面に円を描き、その中にさらに円や記号を描く。夜の9時ないし10時まで待った後に、ベルゼバブの名においてメフィストフィリーズを呼び出す。稲妻と大音響が森を騒がすが、肝心のメフィストフィリーズはなかなか現れず、フォースタスはしびれを切らし、円から離れようとする。その時ニンフの奏でるような、妙なる音楽が聞こえてくる。彼はこれに力を得て、再び魔<sup>プリンス・オブ・デビルズ</sup>王の名においてメフィストフィリーズを呼ぶ。すると頭上にドラゴンが旋回するのが見える。森の奥から、まるで地獄が口を開けたかのように、苛まれる全ての魂たちが神の慈悲を求める物凄い叫び声が湧き起こる。フォースタスの頭上に稲妻のような炎が閃き、やがてそれは火球となる。さらにメフィストフィリーズの名を呼び続けると、火球は二つに割れて炎に包まれた人間ほどの大きさのものが現れ、円の周りを回る。何度も回った後にそのものはフランシスコ会修道士の姿になる。フォースタスはベルゼバブの名において翌朝自宅に来よう悪魔に約束させる。

翌朝、約束通りメフィストフィリーズが来る。この後フォースタスと悪魔は何度か会見する。メフィストフィリーズはフォースタスが求める知識—地獄と悪魔の支配とその権力についての知識—を得るためには、悪魔の側につく必要があるという。彼は魂を失うことなく自分の求めるものを得ようと画策するが、最後にはメフィストフィリーズの提示する条件を受け入れる決心をする。すなわちフォースタスは魂と肉体をルシファーとその使者であるメフィストフィリーズに捧げ、「スピリット(=悪魔)」になるという条件で24年間メフィストフィリーズを使うという契約を結ぶ。契約にはメフィストフィリーズがフォースタスの前に姿をあらわす時は、フランシスコ会修道士の姿を取り、手に持った鐘を鳴らして合図をすること等が含まれている。フォースタスはペンナイフ（鷲ペンを削るため用いる）で左手の静脈を突きさすが、その時彼の手に「おお、人間よ逃れよ」という血で書いたような文字が現れる。するとメフィストフィリーズは消え失せる。それでもフォースタスは小皿に血を入れて温かい灰の上に置き、<sup>プリンス・オブ・オリエント</sup>東方の王とその使者であるメフィストフィリーズにあてた証文を書き署名する。

フォースタスがワグナーとともに<sup>カウンティングハウス</sup>執務部屋で待っていると、メフィストフィリーズが証文を取りに来る。最初炎に包まれた人間の姿で現れ、大声で叫びまわるが、フォースタスは全てを見終わるまで悪魔を部屋に入れない。鎧武者たちの戦闘の騒音や馬の蹄の音が聞こえ、これが

鎮まると獵犬の群れが牡鹿を追うのが見える。牡鹿が殺され、フォースタスが見に行くと目の前にライオンとドラゴンが戦うのが見える。さらにクジャクのつがい、雄牛、巨大な老猿が現れる。猿はフォースタスに握手を求めるが彼は拒絶する。猿が玄関から出ていくと、その場に霧が立ち込め、暗闇となる。やがて霧が晴れると2つの大袋が置いてあり、それぞれに金と銀が詰まっている。次にありとあらゆる楽器で音楽が奏でられ、フォースタスは陶然となる。フランシスコ会修道士の姿をしたメフィストフィリーズが玄関に現れると、フォースタスは素晴らしい娯楽を用意してくれたことに感謝する。メフィストフィリーズは証文をもう一部作ることを勧める。フォースタスはコピーを作成し、悪魔と自分で一部ずつ保管する。フォースタスはメフィストフィリーズとともにおじから相続した家に住み続ける。この書類は彼の死後、もと彼の学生で長年学僕として仕えたクリストファー・ワグナーによって発見されている。

マーロウのフォースタスは飽くなき知識の探求—これは天上、地上、地下、すなわち恒星天<sup>ファーマメント</sup>が内包する世界全てを「見る」ことによって完成する—という点で、EFBのフォースタスの性格を引き継いでいる。またEFBのフォースタス同様、力量ある彼は、神学を修める傍ら他の学問研究にも励み、全てにおいて並はずれた業績を挙げる。しかしEFBの主人公が世俗の野心を満足させるため一端的に言うとは高収入を得るため—の手段として、占星学や医学を極めることに熱心であったのとは対照的に、マーロウのフォースタスは全ての学問に倦み果てている。医学者としての自己の力量について語る台詞—

Are not thy bills hung up as monuments,  
Whereby whole cities have escaped the plague  
And thousand desp'rate maladies been eased?  
Yet art thou still but Faustus, and a man.  
Wouldst thou make man to live eternally?  
Or, being dead, raise them to life again?

(*Doctor Faustus*, A-text, I.i.20-25)

では、彼は自らの考案した不朽の価値を持つ処方箋によって、疫病が多くの都市を壊滅させるのを防ぐことが出来たこと、また以前は死を待つしかなかった難病患者の多くが治るようになったことを振り返る。しかし卓越した医術を以てしても、彼は人に永遠の命を与えることも、死者を蘇らせることも出来ない。彼は人間が獲得できる知識には限界があり、人間としての存在そのものにも限界があることを悟り、この現実について沈思黙考する。

金銭に関してもEFBとマーロウのフォースタスはかなり違っている。EFBでは主人公は金銀の詰まった大袋を与えられたり、指示された場所を掘って燃える石炭の形で埋まっている金銀を手に入れたりする。*Doctor Faustus* ではメフィストフィリーズはフォースタスに魔法の本を与え(II.ii.162)、黄金を手に入れる方法を教えるが、フォースタスの関心はむしろ自らの力量によって支配し、社会状況を改善することにありそうである。彼は魔術の力で、神のように地水火風を支配出来るようになることを期待する。スピリットに命じて持ってこさせた貨幣で兵士を雇い、祖国を外国勢力から守ったうえで、自ら王として君臨することを考える。また小規模ではあるが、やはり支配による改善の一形態として、外敵侵入に対する備えのため、ヴィッ

テンベルクに濠をめぐらすこと、大学のドレスコードに反して学者たちを優雅に装わせることを考えている。

## 2 数回の大旅行（地獄と天界の旅、ローマ訪問、世界旅行の途上楽園を遠望する）<sup>(4)</sup>

マーロウの *Doctor Faustus* では、フォースタスは地獄から彼に会いに来たルシファーに「地獄を見て、再び地上に戻って来ることが出来ればよいが…（II.iii.168）」と願う。ルシファーは深夜に迎えを寄越す約束をするが、A-text には実際の地獄見物のエピソードはない（あるいは欠落している）。EFB ではフォースタスは地獄を訪れた後、8 日間で天界を見学している。また彼は2度にわたって世界旅行を行なっている。マーロウ作品において重要な意味を持つローマ訪問は、EFB では世界旅行の数ある訪問地の一つとして描かれていると言ってよいだろう。旅程半ばで訪れたローマを後にしたフォースタスは、さらに多くの国々を旅行して見聞を広める。やがて一旦帰国するが、旺盛な好奇心を抑えがたく、再び世界旅行に出発することになる。2 度目の世界旅行においてフォースタスは、遠くからではあるが、楽園の光景を見ることができる。

少し長くなるが、EFB におけるフォースタスの旅を概観してみよう。

### 地獄見物

EFB において、地獄見物は悪魔と契約を結んだ8年目に行われている。契約の3分の1の期間を費消したフォースタスは、残る期間をより満足の行くものにしたいと思い、メフィストフィリーズに「ルシファーかベリアルを」呼んでくるように言う。しかしながらメフィストフィリーズはベルゼバブと呼ばれる悪魔を連れてくる。フォースタスはこの悪魔に地獄を見せてくれるよう懇願する。悪魔は即座に同意し「真夜中に迎えに来る」と言う。フォースタスは一心に待っていたが、なかなか迎えに来ないので窓を開けて外を見ると、北の空にひときわ黒い雲が見える。そこから物凄い風が部屋の中まで吹き込み、家中に煙が充満したので、フォースタスは窒息しそうになる。雷鳴とともに毛むくじゃらの黒熊が現れる。熊の背には黄金の延べ金で作った椅子がある。勧められて椅子に座ったフォースタスは深い眠りに落ちる。彼を背に乗せた黒熊は直接地獄へと降るのではなく、空へ舞い上がり、やがて炎をあけて硫黄が燃える場所に到着する。雷鳴がとどろき、フォースタスは目覚める。炎は熱くはなく、むしろ5月の陽光のように心地よく感じられる。音楽が彼を迎える。演奏者の姿は見えないが、フォースタスは予め質問を禁じられている。3匹の悪魔が彼らを出迎える。巨大な牡鹿に椅子から突き落とされそうになるが、悪魔どもが大鹿を撃退する。大蛇や毒を持つ巨大な獣が大勢いる場所を抜けて洞のある絶壁に来到、空飛ぶ巨大な牛が角でフォースタスと黒熊を攻撃する。黒熊は姿を消してしまう。フォースタスは悪魔に欺かれて24年の契約が終わる前に地獄に落とされたと思い悩むが、すぐに大猿が現れて背中に乗るよう勧める。地獄の火は消え、フォースタスは濃い霧の立ち込める中を進む。霧が晴れると、2頭の巨大なドラゴンの牽く戦車が待っているのが見える。フォースタスと大猿を乗せた戦車は暗黒の雲の中を進む。雷鳴と閃光の中、フォースタスは責め苛まれる魂たちの叫びを聞いて恐怖に慄く。戦車は悪臭の立ち込める穢れた沼のような場所に着くと、そのまま水中深く潜る。気がつくとフォースタスは聳え立つ乾いた岩の

上に一人取り残されている。あたりを見回すと火を噴く小さな穴が見つかったので、その中に飛び込む。雷鳴を凌ぐ大音響の中、底まで降りると、皇帝や国王たち、貴族たちを含む魂たちが、燃え盛る火と凍てつくような水という二つの迷宮の中を、熱と寒さに交互に苛まれながら往復している。フォースタスは彼らの中に知人を見つけたように思う。

夜が明ける前にフォースタスを地獄から連れ戻すため、再び黄金の椅子を乗せた熊が現れる。美しい音楽が聞こえ、彼は熊の背に乗って運ばれながら眠りに落ちる。悪魔は彼を自宅のベッドに寝かせて去る。昼頃になってようやく目覚めたフォースタスは、地獄めぐりの顛末を記録に残す。これは後にワグナーによって書斎から発見され、ヴィッテンベルクの人々にキリスト教徒のための戒めとして公開されることになる。

### 天界の諸相を観察する

EFB ではフォースタスは地獄を見物したのち天界を訪れている。彼はライブツィヒにいる学友に、天界での見聞について詳しく記述した手紙を送っているが、それによると一ある日フォースタスはベッドに横たわったまま、天界の形相について、これまで主張されてきた諸学説に思いを巡らせているうちに眠れなくなった。突如、雷鳴がとどろき「声」の指示に従って窓の外を見ると、ドラゴンの牽く炎の四輪戦車が待っている。これは彼の意を汲んだ悪魔が寄越したものである。彼は8日間（火曜日→火曜日）に渡って天界を旅することになる。地獄見物の時には叶わなかったことであるが、今回の旅では見聞したことについて質問をすることが許される。また今回はメフィストフィリーズが同行して解説を受け持つことになる。地球を出発し47リーグ上昇したところで夜が明ける。眼下に望む大洋には今まさに戦争を始めようとしている船団が見える。フォースタスはこの高みから全ヨーロッパ、ロシア、アラビア、中近東、小アジア、インド、中央アジアの国々、エルサレム、酷寒の地域等の世界を見渡すことができた。フォースタスは地上の各地域における気候の違い—ある地域では雨が降っているときに他の地域では雹や雪が降っている。ある地域では山々は万年雪に覆われているのに、別の地域では炎熱で草木も焦げ付かんばかりである—についても知識を得ている。

天界に着いたフォースタスは宇宙の構造について見聞している。宇宙は雲ひとつなく暑い。フォースタスが燃えてしまわないように、メフィストフィリーズが雲の影で覆ってくれる。フォースタスは地球から見上げる宇宙と、間近で見る宇宙との違いを次のように書いている。「地球から見上げるとき、宇宙は城壁のように分厚く堅固であり、水晶のように透明で輝いている。そこに太陽がはめ込まれていて、それが放つ光は宇宙全体に充ち、地球にまで至っている」「地上にいる我々は太陽が非常に小さいと思っているが、宇宙から見ると違っている。太陽本体の大きさはそれほどでもないが、太陽の放つ光線を考えれば、それは世界全体を覆うほど大きい」また「我々は太陽が軌道上を運行し、<sup>ヘブス</sup>天が静止していると考えているが、これは誤りで、軌道上を動いているのは天であって太陽は永遠に同じ場所に止まっている。すなわち太陽は永久に定位置に止まっている。見掛け上太陽は動いているように見えるが、実際に天空全体を動かしているのは天の軸である。<sup>フォーマント</sup>天空とは混沌とした捉えどころのない存在である」フォースタスはさらに天空を、微風に吹かれてふわふわと漂う石鹼の泡にたとえている。これと同じように天空、言い換えれば混沌はその中に太陽と他の惑星を内包し、それらは風すなわち神の霊の意のままに揺れ動くのである<sup>(9)</sup>。

## ローマ訪問

悪魔と契約を結んだ時から数えて15年目が終わる頃、フォースタスは世界中くまなく旅したいという望みを持つようになる。今回の乗物はメフィストフィリーズが姿を変えた天<sup>フライング・ホース</sup>馬である。最初彼らは25日の日程で出発する。訪問地にはアメリカや中国、ペルーも含まれている。その後フォースタスは一旦帰国するが、体を休めると再び諸国を巡る旅に出る。ナポリではウェルギリウスの墓と、彼が一夜にして岩山にトンネルを掘って開通させたという道路を見物する。ヴェネツィアではラグーンの上に建てられた都市という不利な立地条件にもかかわらず、食料が豊富で安価であるのに驚き、また聖マルコ寺院の偉容に感銘を受ける。パデュア<sup>(6)</sup>では大学のドイツ・ユニヴァーシティに登録する際に「知識の探求において飽くなき学者フォースタス博士」と記帳する。

ローマ訪問のエピソードでは、街の様子が詳しく述べられている。ローマを流れるティヴェレ河は街を2分している。河には4つの立派な橋が架けられていて、そのひとつ、聖天使橋<sup>サンタンジェロ</sup>の上には天使城がある。城内には1年の日数と同じだけの鑄造した大砲がある。それらの大砲は1度に7つの砲弾を打ち出すことが出来る。またここには法王宮から天使城に抜ける地下通路についての記述もある。そのほかフォースタスはシーザーがアフリカから持ち帰ったピラミッド（実際はオベリスク）、ローマの7つの教会、水道橋を見物している。彼はメフィストフィリーズとともに姿を消して法王宮に入り、3日間を過ごす。ものを食べたいという欲求を持たず、法王の居室においてひたすら見聞に精を出す。法王がパヴィアの枢機卿をディナーに招いた時には、法王の顔を強打し、宮殿中に鳴り響くほどの声で大笑いする。法王はこの「永遠の断罪を受けた」魂を煉獄から救い出すためのミサを執り行うことを命じる。フォースタスは料理の皿を奪ってカンピドリオ（ローマ7丘の最も高い丘、ジュピター神殿がある）まで逃げる。メフィストフィリーズはフォースタスに飲み物の調達を頼まれ、法王の最上の杯とワイン1瓶を搔ぐ攫う。すべての教会は法王の命令で迷える魂を鎮めるためにミサを挙げる。鐘を鳴らし、鐘と聖書と蠟燭で魂を呪う。

## 楽園の輝きを遠望する

フォースタスはさらに多くの国々を見物した後、1年半ぶりにヴィッテンベルクに帰還する。しかし好奇心旺盛な彼は長旅の疲れも見せず、再び大旅行を計画する。スコットランド北方のオークニー（諸島）<sup>バラダイス</sup>經由でコーカサス山脈（hill となっている）に行き、山の上から世界を眺望する。彼は楽園を見たいと思うが、そのことについてメフィストフィリーズと話し合う勇氣はない。ふと東方の空を眺めると、澄みきった炎の大河が、地上に向かって力強く流れ下るのが見える。それは太陽の放つ光のようであった。彼は谷間に4つの豊かな泉が湧くを見る。それぞれの泉は河となってインド、エジプト、アルメニア（2つ）へと向かっている。フォースタスは泉の性質と源泉とについてメフィストフィリーズに問わずにはいられない。メフィストフィリーズは次のように答える。「東方にあるのは楽園である。フォースタスが遠望した炎の河は楽園の防護壁である。フォースタスのはるか遠方に見た澄んだ光は、炎の剣を持って楽園を守護する天使である。楽園は間近にあるように見えるが、実際は遥か彼方にある。フォースタスが見た4つに分かれた泉は、楽園の中央にある泉から湧きだしたものである。天頂の方向、天秤宮と白羊宮の下、炎の防護壁の上に佇立しているのは天使ミカエルである。彼は炎の剣を持って生命の樹を守護しているのだ」フォースタスの質問に答えた後、メフィストフィリー

ズは「君も私も、否、我々の後に来る何人も楽園を訪れることは出来ないし、我々の現在いる場所より一歩たりと楽園に近づくことは出来ない」と締めくくる。

EFB ではフォースタスの地獄見物およびそれに続く天界見物は、悪魔との契約を結んでから3分の1が過ぎた8年目に行われている。またローマ訪問及び楽園の外観見物を含む世界旅行は、契約も3分の2近くが過ぎた15年目以降に行われている。*Doctor Faustus* ではフォースタスは地獄から来たルシファーに7大罪が各々自己について語る一種のショーを楽しませてもらったうえで地獄見物を願い出ると、ルシファーは「真夜中に迎えを寄越す (II.iii.170)」と約束する。しかしすでに示唆したように、地獄見物の場はなく、天界見学についても、第3幕において、コーラス役を務めるワグナーに、フォースタスが宇宙<sup>コズモグラフィ</sup>の形状を検証するため、ドラゴンの牽く炎の戦車に乗って天界を旅したことを物語らせるだけである。フォースタスはこの旅で天文学の真理を見極めると、ローマ訪問のため、地球目指して降下する。EFB においては天界旅行とローマ訪問を含む世界旅行は、7~8年の時を隔てて行われている。*Doctor Faustus* では一度で行われ、フォースタスは天界旅行の後の疲れを見せず休むことなく、トリエル、パリ、ナポリ、ウェルギリウスの墓、彼が掘ったといわれるトンネル、ヴェネツィアの聖マルコ寺院、著名な大学のあるパデュー等を経由してローマに至る。また EFB ではローマ訪問の日時は示されていないが、*Doctor Faustus* では、主人公は法王庁で聖ペテロの日(6月29日)を祝う宴が行われる日に合わせるようにローマを訪問している。夏至の日に近いこの日は、太陽が絶頂期から次第に力を失っていく転換点でもある。

*Doctor Faustus* ではメフィストフィリーズが解説するローマの市街の様子は、街を2分するティヴェレ河、河にかかる4つの橋、シーザーがアフリカから持ち帰ったピラミッド、<sup>カステルサンジェロ</sup>天使城、およびその内部に1年と同じ数だけ収蔵されている真鍮製の大砲について等々、天使城が天使橋の上に建造されているという誤謬も含めて、EFB の記述をほぼそのまま踏襲している。しかし先に述べたフォースタスの旅程―「神の天空」「オリンボスの高み」から一気に急降下して地上を滑空し、最終目的地であるローマへと向かう旅程―をたどると、聖なる都市ローマが、地底深く位置する地獄の王国であるかのような錯覚に陥る。フォースタスは7つの丘の上に建てられたローマの街に関するメフィストフィリーズの解説に触発され、冥界の河にかけてローマの街を見物することを願うが―

Now, by the kingdoms of infernal rule,  
Of Styx, Acheron, and the fiery lake  
Of ever-burning Phlegethon, I swear  
That I do long to see the monuments  
And situation of bright splendid Rome.

(III.i.44-48)

この誓言からは、彼の心の中で、城壁に囲まれ、ティヴェレ河が貫流するローマの偉容が、堅牢な城壁に囲まれ、4つの河の流れる地下の王国の偉容と二重写しになっていることがわかる。しかしフォースタスが見物することになるローマは、EFB における狭霧と硫黄の火と、巨大な獣類の姿を取った悪魔たちで充ち満ちていた地獄とは違っている。フォースタスは修道士姿のメフィストフィリーズに導かれて、巫女シビルラに導かれるアエネアスのように壮麗

な地下世界に降るのである<sup>(7)</sup>。

法王の祝宴において、料理とワインを奪うという状況も EFB とは異なっている。EFB ではすでに述べたように、見聞を深めるため3日間飲まず食わず過ごしたフォースタスは、メフィストフィリーズの協力で料理とワインを奪ってカンピドリオまで逃げる。ここでは料理とワインは腹を空かした主人公の口腹を満たす「飲食物」に過ぎない。*Doctor Faustus* では料理とワインは聖餐を思わせる故に非常にアイロニカルな物質になる。フォースタスは枢機卿等とともに口腹を満たすのに忙しい法王から豪華な料理とワインを奪い、驚いた法王が3度目に十字を切った時に一聖ペテロが3度キリストを否定して非難された故事をふまえて—その横面を殴りつける。

### 3 カロルス5世の宮廷訪問<sup>(8)</sup>

フォースタスのカロルス5世(1516-56:スペイン王、1519-56:神聖ローマ帝国皇帝)訪問は、マロウの *Doctor Faustus* における主要なエピソードのひとつである。まず EFB の記述を見よう。フォースタスはカロルス5世の宮廷があるインスブルックに滞在している間に、当地の貴顕紳士たちの知遇を得るようになる。宮廷の食事会に招かれた時、皇帝はフォースタスの風貌に目を留め、貴族たちの一人に彼の名を尋ねる。皇帝は彼がフォースタスであると知ると、私室に招いて「私はあなたの魔術師としての名声を知っており、使い魔を従えているという噂も聞いている。皇帝冠にかけて、魔術を行った<sup>フラット</sup> 廉で危害を加えることはしないと誓うので、その技能を見せてほしい」と頼む。フォースタスはこの条件のもとに皇帝の希望を尋ねる。皇帝は「一人でいる時などに皇統の祖先たちのことを考えると、私も含め子孫たちには、彼等が備えていたような、堂々たる威信を示す力量はないという思いにとらわれてしまう。そこで、皇帝たる自らも子孫たちも、その域に達することが不可能な最高の君主、年代記に記されたように、多くの王国を征服して従え莫大な富を手にしたゆえに、君主たる者の最高の鑑にして目標となった、アレクサンダー大王と美貌の誉れ高い彼の寵姫の、生きているときそのままの姿を見たい」と希望する。フォースタスは皇帝の希望に応じ「彼らの亡骸を生きている姿で御前に連れてくることは不可能なので、スピリットたちにアレクサンダーと寵姫の最も華やかで盛んであった時の姿を取らせてお目にかけろ」という。これは皇帝がスピリットに質問することも話しかけることもしないという条件のもとに行われる。フォースタスが皇帝の私室の扉を開けると大王が入ってくる。立派な鎧に身を固めた美丈夫だが、目はバジリスクのようである。皇帝は思わず大王の会釈に応えようとしてフォースタスに制止される。大王が恭しく会釈して扉から出ようとしたとき、彼の寵姫が入ってくる。豪華なブルーのベルベットを身にまとった美しい姿に皇帝は満足するが、ふと、スピリットたちに騙されているのではという疑念を抱く。彼は寵姫の首筋には大きな疣または瘤があったという伝聞を思い出し、無言でフォースタスの腕を取って確かめに行こうとする。スピリットはこれに気付くと頭を垂れて疣を見せるが、直ちに消え失せてしまう。皇帝や周りの人々は非常に満足する。

この後フォースタスは回廊に行く。中庭を散策している宮廷人たちを眺めていると、暑い日であったせいか、大広間の窓枠から頭を突き出して眠りこんでしまった騎士を見つける。彼はメフィストフィリーズの力を借りて、この男の頭に一对の鹿の角を生やす。騎士は目を覚まし、窓から無理やり頭を引っ込めようとするがうまくいかず、窓ガラスを割ってしまう。この様子



を見ていた皇帝や廷臣たちは爆笑する。フォースタスは彼の頭から角を取り除いてやるが、騎士は復讐を決意する。

フォースタスは皇帝と廷臣たちに暇を告げる。彼らは残念がり、多額の報酬と贈物を与える。街から1リーグ半行ったところで、フォースタスは騎士が仲間を連れて向かってくるのに気付く。彼はあたり一面の藪を全て騎馬武者に変えて一行を包囲させる。騎士と仲間の者たちは許しを乞う。フォースタスは彼らを許すが、罰として1カ月の間騎士たちには山羊の角、彼らの乗馬には牛の角を生やしておく。

*Doctor Faustus* では皇帝カロルス5世は、貴族たちに交じって宮廷の宴を楽しんでいたフォースタスに「帝冠にかけて身の安全を保証する」と言う条件のもとに「魔術」<sup>フラグメント</sup>の腕前を披露することを求める。物語の展開はほぼEFBと同じである。しかしほぼ忠実に底本に従いながら、EFBと*Doctor Faustus*では、主人公と、彼が呼びだしたスピリットたちの与える印象に微妙な違いがある。EFBではフォースタスの悪戯で角を生やされる騎士は、降霊術のエピソードとは独立して物語の後半に登場する。彼は偶然フォースタスの目にとまったため、不運にも頭に角を生やされるという災難に会うのだが、マーロウ作品では騎士は、アレクサンダーと寵姫を呼び出すための打ち合わせに余念のない皇帝とフォースタスの会話に割り込んで邪魔をしたため、魔術師に仕返しとして「アクタイオンの角」を付けられたという設定になっている。

アレクサンダーの寵姫の首筋に生前、疣もしくは黒子があったという説をもとに、目の前にいる寵姫の真偽を確かめる場面では、EFBのフォースタスは、疑念を晴らすべく寵姫に近づこうとする皇帝の意のままに動く。美貌の寵姫は皇帝の意図を見抜いて頭を垂れ、疣を見せると直ちに消え失せるが、このグロテスクな一瞬において悪魔の本性を見せたと考えてよいだろう。マーロウ作品では、皇帝はフォースタスに疣もしくは黒子の有無を確かめる方法を尋ねるが、フォースタスは—Your Highness may boldly go and see. (IV.i.71)—「陛下ご自身が勇氣をだして寵姫に近づき、お確かめなさればよいでしょう」と答えている。またアレクサンダーと寵姫は、皇帝が進み出て—an inspection—「検分」を終えると、即座に連立って退場する。以上の点から見て、マーロウ作品では、フォースタスのみならず、実は「スピリット」に過ぎないアレクサンダー（ここでは「バジリスクの眼」をしているという記述はない）と寵姫にも、一種の品格が備わっていると考えてよいだろう。

#### 4 アンホルト公爵夫妻訪問<sup>(9)</sup>

フォースタスのアンホルト公爵夫妻訪問は、前述のカロルス5世訪問とともに、マーロウの*Doctor Faustus*における主要なエピソードのひとつである。まずEFBの記述を見てみよう。

フォースタスは1月に公爵の宮廷を訪問し、非常に丁重に迎えられる。食卓についているとき、フォースタスは公爵夫人が妊娠中であることに気づいて「身重のご婦人はどなたも珍しい風味の良い食べ物をお望みになるものです。奥方様も何か特に召し上がりたい珍味はございませんか」と尋ねる。公爵夫人は「仮に今が収穫の季節ならば、ブドウやそのほかのおいしい果物をお腹いっぱい食べたいものです」と打ち明ける。フォースタスは1枚の皿を取ると、窓の一つを開けて外に突き出す。一瞬のうちに皿の上には赤と白のブドウ、梨、リンゴをはじめあらゆる種類の果物が山盛りになる。公爵夫人はフォースタスに感謝して果物を食べる。公爵は

フォースタスが冬のさなかに新鮮な果物を手に入れたことを不思議に思い、理由を尋ねる。フォースタスが「全世界ということで考えますと、1年は2つのサークルに分けられております。我々の属するサークルでは冬でも、別のサークルでは夏なのでございます。またインドや（西インド諸島にある）サバは、太陽が出入りするところですので、温かいため、1年に2度果物を収穫できます。私は俊足のスピリットを従えているのですが、その者は1度瞬きする間に、これらの国々に行って果物を持ってきてくれるのです」と言うと、公爵は感嘆する。

*Doctor Faustus* には描かれていないが、EFBではフォースタスは公爵の宮廷において2度目の魔術を使っている。フォースタスは公爵夫妻を誘って宮廷の外に連れ出す。彼は魔術の力で丘の上に堂々たる城を築く。城の周りには掘割があり、水鳥が群れている。城壁の中には大きな庭があって、そこには外国産の珍しい獣たち、鹿やのろ、家禽の類が飼われている。フォースタスは公爵夫妻とお付きの人々を城内に案内し、素晴らしい料理とワインでもてなす。飲食物はすべて目に見えないスピリットが調達したものである。宴が果てた後、宮殿に帰った人々は、たった今、後にしたばかりの魔法の城が炎に包まれ、大音響とともに灰燼に帰す様を眺めて驚く。公爵はフォースタスに謝礼金を贈る。

EFBの記述を読んだ上で、*Doctor Faustus* の該当箇所を検討すると、物語と戯曲との表現法の違いは別にしても、そこには底本を改変していくうえでのマーロウの意図が見え隠れする。EFBでは身重の公爵夫人が果物を食べたいと願う個所で、夫人は「葡萄やその他のおいしい果物」を食べたいと希望し、承ったフォースタスが窓の外に皿を突き出すと、たちまち皿の上には目に見えぬスピリット（メフィストフィリーズ）の手で「赤と白のブドウ、梨、リンゴをはじめあらゆる種類の果物」が山と積まれる。ちなみにEFBでは「窓」あるいは「窓枠」（casement）を境にした家の内側と外側が、人間の世界と不可視の世界との接点になっている場合が多い。

*Doctor Faustus* では、冬に葡萄を手に入れることのできる不思議の説明として、多少の改変はあるものの、ほぼEFBの記述を踏襲している。両者とも対照的な季節が併存することの説明として「南半球」を示唆してはいない。しかしながらマーロウはインドやサバの地名を挙げつつも、その地の気候が温暖である理由として「太陽が出入りするところに近い」からであるとするEFBの記述を省略している。

また *Doctor Faustus* では、フォースタスは、彼以外の人の目に見えない（という設定の）メフィストフィリーズに密かに命じて所望の果物を取ってこさせている。ここでは果物は夫人が唯一名を挙げた「葡萄」（IV.ii.12）のみに限定されている。またEFBでは、夫人は供された果物を「旺盛な食欲で食べた」という記述があるが、*Doctor Faustus* では、この個所はマーロウによって、むしろ聖体拝領を思わせるシーンに作り変えられている。すなわちフォースタスは身重の公爵夫人に葡萄を「味わう」よう勧め—“Here they be, madam. Will't please you taste on them? (IV.ii.17)”— 貴重な果物を食べた夫人は、この葡萄を「これまでの人生で味わった最高の葡萄」であるといってフォースタスを満足させる。

## 5 トロイのヘレンについてのエピソード

トロイのヘレンについては、資料であるEFBにおいて2度記述されている。1度目はシュロップタイド（告解の3日が、灰の水曜日前の3日間）から灰の水曜日へと続く期間、2度目

は悪魔と契約を結んでから 23 年目の時である。一方マーロウの *Doctor Faustus* においては、ヘレンは契約期間が終了する間際の第 5 幕 1 場において 2 度登場する。まず EFB の記述を見てみよう。

#### 学者たちを宴に招く<sup>(10)</sup>

フォースタスはシュロウブタイドと灰の水曜日に学者たちを招いて飲み騒ぐ。彼はふんだんに酒や食べ物を振る舞い、また余興としてテーブルの上で杯やコップや壺にダンスを踊らせる。フォースタスが窓から長い竿を突き出すと、無数の鳥がやってくる。彼は魔法の力で呪縛された鳥どもを捉えて学者たちに渡す。彼らは鳥の首を引き抜いて炙り、皆で食べるための夕食を拵える。

木曜日は大雪になる。学者たちはフォースタスを招いて納め<sup>アッシュウェンズディ</sup>の飲み騒ぎを催す。フォースタスは余興として 13 頭の大猿にダンスをさせる。学者たちは炙った子牛の頭から一切れの肉を切り取り、フォースタスの皿に入れる。すると子牛の頭が大声で「人殺し、人殺し」と叫び出す。学者たちは最初魂消るが、すぐにフォースタスの魔法であると気づいて、笑いながら競って子牛の頭から肉を切り取って平らげてしまい、頭をバラバラにしてしまう。次にフォースタスは 4 頭の火竜の牽く轡を造って夜中になるまで家の中を乗り回し、学者たちを怖がらせる。

日曜日になると学者たちは酒と食物を持ってフォースタスの家にやってくる。ワインを飲みながら楽しく語らううちに、話題は女性美のことになる。彼らのうちの一人が「もし可能ならば、価値あるトロイが破壊され、瓦礫と化す原因を作った、美しいギリシアのヘレンの姿を一目見たいものだ」という。フォースタスは以前カロルス 5 世のためにアレクサンダー大王とその寵姫を見せたことに言及し、彼女がいる間は「沈黙を守り、テーブルに就いたまま立ち上がらない」ことを条件にヘレンを見せることを約束する。彼は一旦部屋から出るが、すぐに豪華な紫のベルベットの衣装を身にまとった金髪のヘレンを連れて戻ってくる。学者たちには彼女は地上のものにあらず、天上の存在のように見える。彼女には不完全な部分は 1 か所もない。しかし彼女の目は驚の目である。学者たちはみなヘレンに焦がれるが、彼女はスピリット（悪魔）であると自らに言い聞かせる。

#### 美女たち、地下に隠された金銀、息子の誕生<sup>(11)</sup>

20 年目になり、約束の期日が 4 年後に迫ってくると、フォースタスは酒色に溺れるようになる。彼はメフィストフィリーズに命じて、これまでの旅先で見た美女たちのうち、最も美しい 7 人を選んで連れてこさせ、起居を共にし、旅に伴っていく。このようにしてフォースタスは最後まで彼女たちをそばに置いていた。22 年目が終わった時、悪魔は彼を唯一の相続人に指名し、莫大な金のありかを教える。ヴィッテンベルクから半マイルの場所にある朽ち果てた礼拝堂に行き、指定された場所を掘ると、巨大な蛇がいる。蛇を追ひ払うところには石炭が燃えており、また地獄で責め苦にあっている多くの人々の姿が見え、苦悶の叫びが聞き取れた。フォースタスが石炭を持って家に帰ると、それは 1,000 ギルダーの価値がある金銀に変わった。

23 年目になると、フォースタスはかつてヴィッテンベルクの学者たちに見せたギリシアのヘレンを再び連れてこさせる。彼とヘレンとの間に息子が生まれる。

マーロウの *Doctor Faustus* では、フォースタスは 24 年がまさに終わろうとするとき、ワグナー

に気前良く全財産を贈与する。また若い頃から一緒に学んできた学者たち—chamber-fellow (V.ii.3)—を自宅に招いて豪勢なもてなしをする。その際、彼らの願いを聞き入れてヘレンを呼び出す。学者たちが満足して辞去しようとする、彼等と入れかわるようにして、EFBにおいて信心深い隣人として彼をいさめる「老人」が、ここではより権威ある忠告者として登場する。フォースタスは動揺するが、メフィストフィリーズに違約を非難されると、ルシファーとの契約に忠実であり続けるために、神の慈悲を求める衝動を忘れさせてくれるヘレンを寵妃にしたいと言いつくす。

EFBにおいて、フォースタスは魔術によって鳥や獣たちを呪縛し、宴会用の料理として、また余興の道具として意のままに使役した。トロイのヘレンの最初の呼び出しは、ワインと食べ物を持って返礼にきた学者たちとの間でより穏やかな歓談が行われているときであるとはいえ、一連の飲み騒ぎの際に行われた余興の一つであると言える。フォースタスがカールス5世の願いを受けて呼び出した威厳あるアレクサンダー大王が「バジリスクの目」をしていたように、一見、天上の存在のように見える完全無欠な美女ヘレンの目は「鷲の目」とであると明示されていることは、彼女が疑いもなく悪魔の化身であることの証拠である。

一方 *Doctor Faustus* に登場するヘレンは、明確に悪魔の化身とはいえぬ何かを感じさせる。ここではフォースタスが学者たちを招く宴は、魂を代償に24年間知識を集積した彼の最後の別れの宴である。招かれた学者の一人は「世界の美女はトロイのヘレンである」という学者仲間での討論の末に出された結論を披露する。フォースタスの好意で、この「比類なきギリシアの貴婦人 (V.i.14)」を目のあたりにしたのち、満足して辞去する学者たちの言葉—

*Second Scholar.* Too simple is my wit to tell her praise,  
Whom all the world admires for majesty.  
...

*First Scholar.* Since we have seen the pride of nature's works  
And only paragon of excellence,  
Let us depart;

(V.i.26~33)

からは、彼らがEFBで描かれている学者たちとは異なる見地からヘレンを見ていることが感じられる。学者たちの言葉は、古典研究に生涯を捧げた人々が、彼らにとって「神」とも言える古典文学の精髓を目のあたりにした時の、もはや思い残すことはない満足の言葉であると言えるだろう。彼らが去った後、再び登場したヘレンを腕に抱いたフォースタスの言葉—*Instead of Troy shall Wittenberg be sacked*, (V.i.99)—も、ヴィッテンベルクが堅固な宗教思想の牙城であったことを考えると、恋人の言葉とは違ったコンテキストで解釈することが可能である。

## 6 ワグナーを相続人に指名する、学者たちとの別れ、手記の発見<sup>(12)</sup>

フォースタスの最後についての記述は、上述のトロイのヘレンに関するエピソードも含め、マーロウの戯曲と底本であるEFBとはかなり違っている。まずEFBを概観してみよう。

最後の年である 24 年目も終わりに近づくと、フォースタスは書記を呼び、友人たちの前で、ワグナーに屋敷と庭園、および 1,600 ギルダの現金を含む財産すべてを遺贈する旨の遺言書を作成する。ワグナーは魔術の能力を授かることを願う。フォースタスは私的な楽しみのためにのみ用いることを条件に（魔術に必要な）蔵書を与える。またメフィストフィリーズはフォースタスとともに去ることになるので、ワグナーのため、新たに Akercock という名のスピリットを与える約束をする。これはワグナーの希望で大猿の姿を借りることになる。これら魔術を行うために必要なことから、フォースタスが書き溜めておいた 24 年間の記録を出版するという条件のもとにワグナーに与えられる。

時は迫り、フォースタスは隠れる場所もないことを嘆く。24 年目が終わろうとするとき、メフィストフィリーズは証文を振りかざし、準備をするようにという。フォースタスはヴィッテンベルクから半マイルの距離にある Rimlich 村（の宿屋？）に親しい学者たちを招いて宴席を設け、ディナーと夜食をともにする。寝室に退く時間になると、フォースタスは学者たちに「夜中、怪しい物音がしても起きてはならない」と忠告する。真夜中の 12 時と 1 時の間に強風が吹き荒れ、学者たちはフォースタスが寝ている部屋から蛇のシューシューという音と助けを呼ぶ声を聞く。夜が明けて学者たちはフォースタスのバラバラにされた体が彼のいた部屋と裏庭に散らばっているのを発見する。彼らはその村にフォースタスを埋葬した後、ヴィッテンベルクに帰り、事の次第をワグナーに知らせる。彼らはフォースタスの自伝に最後の状況を付け加える。ヘレンと息子ジャスタス・フォースタスはフォースタスの死んだ日に消え失せる。またその夜、ワグナーの前に生前の姿をしたフォースタスが現れ、彼がかつて行ない、隠していた多くの事柄についての秘密を開示する。その後も夜間フォースタスの家の前を通りかかった人々のうち何人かは、彼が窓から外を眺めているのを目にしている。

EFB においてフォースタスが死の直前に行う身辺整理について考えると、彼はその間に世界中どこにも身を隠す場所がないことを嘆きはするが、客観的に見ると、悪魔に連れ去られることを恐れる人のものとは思えない周到さが感じられる。彼はワグナーに動産、不動産を遺贈しただけでなく、自分にメフィストフィリーズがいたように、新たに弟子専用のスピリットまで手配して後を継がせている。このこと、およびフォースタスが自らの 24 年間の記録が間違いなく出版されるように細心の注意を払ったことを考えると、予想される悲惨な最期にもかかわらず、彼が自分の人生に十分な価値を認めていたのではないかと思えてくる。これは墮地獄を恐れ、神に背いたことを後悔する人の行動と言うより、むしろ地上での仕事を終え、仲間とともに新たな世界へと向かう人のそれであると言えるだろう。彼は死後間もなくワグナーの前に姿を現して、神秘的な事柄を開示するが、これは十字架に架けられた後、死から蘇ったキリストが弟子たちの前に姿を顕したことを連想させる出来事である。

*Doctor Faustus* ではフォースタスはワグナーに全財産を譲り、前述のように、学者たちを招いて別れの宴を催し、その際初めてトロイのヘレンを呼び出す。彼はその後再び自宅を訪ねてきた学者たち（学寮で学んでいた頃のルームメートたちでもある）に、初めて悪魔との間に 24 年の契約を結んだことを打ち明ける。フォースタスが悪魔の到来を待つ間、学者たちは隣室で彼の救いのため神に祈りをささげる。

EFB ではフォースタスが悪魔に連れ去られる時、隣室で固唾を飲んで待機していた学者た

ちは、強い風の音や蛇のシューシューという音を聞いている。雷鳴、稲妻、火、暴風、黒雲、巨大な鳥獣類等は EFB に頻出しているが、これらはすべて悪魔および地獄と緊密に関連している。一方マーロウの戯曲においては、フォースタスが悪魔に連れ去られる過程は、彼の魂が最後の葛藤をする過程として描かれている。フォースタスは神のいる方向に向かって跳び上がろうとするが、何者かが彼を地獄の方向に引き降ろそうとする。彼は空にキリストの血が流れるのを見て—See, see where Christ's blood streams in the firmament! (V.ii.78)—その一滴の半分でもあれば救われると思うが、ルシファーの名を口にした途端、ヴィジョンは消え失せ、代わりに「神が腕を伸ばし、怒りに眉を顰める (V.ii.82-83)」のが見える。フォースタスは最後まで救済の望みと地獄落ちの恐怖の間で揺れ動くが、ついに悪魔に連れ去られてしまう。

## まとめ

*Doctor Faustus* について、資料である EFB を中心に考察した。EFB については 1985 年に 1592 年版のファクシミリ、*The History of the Damnable Life and the Deserved Death of Doctor John Faustus* (Hildesheim, Zurich, New York: Georg Olms Verlag, 1985) が出版されている。その後 1994 年に J. H. ジョーンズ校訂の、*John Henry Jones ed. The English Faust Book translated by P. F.* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994) が出版されたが、これにはタイプアウトされた *The Damnable Life* 全編が収録されており、かつ校訂者による精緻な検証がなされている。

EFB はフォースタス自身の残した記録に加え、友人の学者たちが彼の死の顛末について書いたものを付け加えて出版したという一種の疑似伝記である。作品形式の違いはあるが、EFB の側から *Doctor Faustus* に光をあてると、戯曲を読んだだけでは見えにくい側面に気付かされる。EFB は GFB を翻訳したものである故か、物語はゲルマン的な色彩が際立っている。またマーロウ作品と比べ、ルネサンス的というよりむしろ中世的な雰囲気濃厚である。しかし EFB に頻繁に挿入されている、フォースタスが “Damnable Life” を送った結果、“Deserved Death” を甘受しなければならなかったという趣旨の、厳しい検閲が行われていた当時の社会では不可欠であった「教訓」を除けば、EFB はむしろ中世からルネサンスに移行する時代を生きた、知識人であり、学生気分が抜けない大学人である、主人公の冒険と知の探求の物語であるといってもよい。

*Doctor Faustus* では、主人公は誘惑者であるメフィストフィリーズに—

This word ‘damnation’ terrifies not him,

For he confounds hell in Elysium.

His ghost be with the old philosophers!

(I.iii.60-62)

と言う。彼もまた EFB の主人公と同じく、メフィストフィリーズを媒介にして知識を獲得する。しかしマーロウ作品では古典文化への傾倒とキリスト教への懐疑的態度が明白に示されている。フォースタスはヘレンに象徴される古典文化を高く評価する。教皇から聖餐式に用いる「葡萄/ワイン」の独占権を奪い、アンホルト公爵夫人に与える。またフォースタスは “firmament” に、神が威嚇的に手を広げ、眉を顰めるヴィジョンを見るが、「天空／<sup>ファームメント</sup>恒星天」

とは、その中に天界と地上と地獄を内包する神の創造した秩序の外枠であり、固く閉ざされて逃げ場のない世界を包む檻であることは銘記すべきである。

## 資 料

Christopher Marlowe, *Doctor Faustus: A-and B Texts (1604, 1616)*, eds. David Bevington and Eric Rasmussen (Manchester: Manchester U. P., 1993), 本文中の引用はこの版による。

Christopher Marlowe, *Doctor Faustus*, ed. Roma Gill (London: A & C Black, 1991)

*The History of the Damnable life and the Deserved Death of Doctor John Faustus* (Hildesheim: Georg Olms Verlag, 1985)

John Henry Jones ed. *The English Faust Book translated by P. F.* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994)

## 注

- (1) John Henry Jones ed. *The English Faust Book translated by P. F.* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994), p.1, p.246 参照。
- (2) William Empson, *Faustus and the Censor: The English Faust-book and Marlowe's Doctor Faustus* (Oxford: Basil Blackwell Ltd, 1987), p.78.
- (3) EFB, Chapters 1-8.
- (4) EFB, Chapters 20-23.
- (5) フォースタスの記述は、プトレマイオスの考えた（そしてキリスト教会公認の）天動説に基づく宇宙の形態と一致する部分と、おそらく検閲を意識したためか、非常に分かりにくい、このころすでに知られつつあったコペルニクスの地動説を思わせる部分とが交錯している。エンブソンはノーサンバーランド伯爵の庇護を受けていた文化人たち—マーロウもその一員であった—は、好んでこのキリスト教神学を覆す恐れのある新説を論じ合ったと推測している。またエンブソンは GFB の翻訳者である P. F. Gent（なお、EFB には当時の翻訳の常で、自由訳に近い部分や、訳者の好みによる付け足し等が見うけられる）も、メンバーの一員であったと推測している。*Faustus and the Censor*, p.78 参照。
- (6) パドヴァ（パデュア）大学は当時ローマ教皇の権威に服することがなかった都市国家ヴェネツィアの支配下にあり、学問と思想の自由を守ることが出来た。しかし反動宗教改革による旧教側の統制強化、および 1534 年のイエズイット教団の設立により、各地の大学にイエズイットの学寮が設けられ、異端の攻撃と大学の乗っ取りがはじまる。パドヴァ大学においてもそれが出来、学生たちが騒動を起こす。大学はヴェネツィア政庁を説得してイエズイット教団を抑える努力をする。1606 年、イエズイット教団はヴェネツィア領内から追放される。野田又男『ルネサンスの思想家たち』（岩波書店、1982 年）、pp.177-8 参照。
- (7) ここには冥界の 4 つ目の河である Cocytus（コーキュートス、嘆きの河）、についての言及はない。しかしローマと地獄との類似は EFB の記述に基づいているとはいえ、街を 2 分するティヴェレ河に架かる橋の数が 4 であることから強められるだろう。フォースタスのローマ訪問とウェルギリウスの地下の旅の類似については、*Doctor Faustus: A-and B Texts (1604, 1616)*、p.164, footnote 参照。
- (8) EFB, Chapters 29-31.
- (9) EFB, Chapters 39-40.
- (10) EFB, Chapters 42-45.
- (11) EFB, Chapters 53-55.
- (12) EFB, Chapters 56-63.